

新型インフルエンザとホメオパシー

新型インフルエンザの脅威が毎日のように報道され、予防のためのワクチン接種の必要性が叫ばれています。これからの時代を生き抜くには「真実」は何なのかを見極める目と「本当の情報」が必要です。とらこ先生も言われているように、「私たちは賢くあらねばならない」のです。オアシスでは、いくつかの情報を会員の皆様に共有したいと思います。詳細は JPHMA ホームページか RAH - UK 校ホームページの体験談をご覧ください。

予防接種トデモ論

とらこ先生は以前から「ガイドブック⑥ ホメオパシー的予防」、「予防接種トデモ論」（2008年刊）の中でスペイン風邪とインフルエンザについて、予防接種やクスリの話も交えながら、紹介してきています。ホメオパシー出版から、オアシス誌上での紹介を認めていただきましたので関連部分を抜粋し紹介させていただきます。

1918年から翌年にかけて発生したスペイン風邪では6億人が罹患し、死者は数千万人にのぼったといわれます。しかし、このスペイン風邪の大流行を医学史研究家が調査したところ、広範囲で実施された予防接種が原因である、という結論に到達しました。当時は第一次世界大戦の真っただ中でしたが、この戦争はすべての兵士が強制的に予防接種を受けた初めての戦争でもありました。

『ボストン・ヘラルド』誌は「1カ月間に47人の兵士が予防接種のために亡くなり、そのため陸軍病院は戦闘で負傷した犠牲者ではなく、予防接種の犠牲者でいっぱいになってしまった。」と報じています。現代医療では、インフルエンザウイルスに有効な治療薬はなく、症状に合わせた対症療法が主となります（感染初期にウイルスの増殖を抑制する抗ウイルス剤、タミフルがありますが、さまざまな副作用の可能性が考えられるため、原則として10代には使用禁止とされました〈2007年3月20日〉）。

抗ウイルス薬というのは、人の細胞内でウイルスの遺伝子の複製を妨害する薬ですが、それだけを妨害するのではなく、人の遺伝子の複製をも妨害する可能性があり、そういう意味で毒性が強いものです。また、高熱や頭痛には解熱鎮痛薬が用いられますが、それらを用いて症状を抑圧することで、特に、1歳代を中心に5歳未満の幼児で脳炎や脳症（いわゆる「インフルエンザ脳症」）を多く発症し、激しいおう吐を起し、意識不明に陥ることがあります。インフルエンザ脳症にはいくつかのタイプがあるとみられています。その1つと考えられるライ症候群※の場合には、イン



『予防接種トデモ論』
由井寅子 著
ホメオパシー出版 刊

フルエンザや水痘ウイルスへの感染後に、多くのケースで非ステロイド系抗炎症鎮痛剤であるアスピリン（一般名／アセチルサリチル酸）を投与したことが、その発症に深くかかわっているとみられています。

※ライ症候群—ライ症候群とは、発熱、けいれん、意識障害を主訴として、肝機能障害を伴う急性脳症で、オーストラリアの病理学者ライらによる報告にちなんで命名された。死亡に至る多くのケースでは、アスピリンなどの抗炎症鎮痛剤が使われていた。

日本でも1999年と2000年、厚生省（当時）の研究班が、非ステロイド系消炎剤のジクロフェナクナトリウム（商品名／ボルタレンなど）の投与者に、インフルエンザ感染後の脳炎・脳症による死亡率が高く、症状の重症化にかかわっている可能性があるという調査結果をまとめています。

これを受けて厚生省は、インフルエンザ脳炎・脳症患者への治療には、ジクロフェナクナトリウム（商品名／ボルタレンなど）を使わないよう医療機関などに指導することになりました。また、同じ非ステロイド系消炎剤のメフェナム酸（商品名／ポンタールなど）については、悪影響をおよぼすものと決定されたわけではないとして、調査を続けるとしました。

このことからわかるように、インフルエンザ感染時にはくれぐれも解熱鎮痛剤を使わないよう気をつけなければなりません。インフルエンザに限らず、感染症において、熱を止めることは危険なことなのです。熱は必要だけ出しきらせることが大切です。インフルエンザに感染する土壌をきれいにするために熱が出ているということを理解しなければなりません。発熱時は体が消耗しないように早目にレメディーをとったり、消化のよいおかゆやスープなどをもって安静にすることです。

予防には流行の型に合ったワクチンを接種しますが、毎年、形を変えてしまうインフルエンザウイルスに合ったワクチンをつくることはほとんど不可能であり、科学的にもインフルエンザワクチンには予防効果がないといわれています。

その上、副作用はしっかりあります。たとえば、1993年まではインフルエンザの予防接種も法律で決められていた義務接種でしたが、当時、障害や死亡など、重篤な被害を受けた人だけでも推定千人以上になるといわれています。このような経緯があって、1994年にインフルエンザの予防接種は義務ではなくなりました。しかし現実はいまでも国をあげてインフルエンザワクチンの接種を推奨しているのです。

スペイン風邪へのホメオパシーでの対応

スペイン風邪の流行から3年後に開かれた全米ホメオパシー協会年次大会のレポートでは、最前線で治療に当たった40人以上のホメオパスたちの証言が紹介されています。スペイン風邪の驚くべき側面、死亡率を高めた真の原因や、ホメオパシーの有効性やホメオパスの活躍が記録されており、その中から一部を抜粋し紹介します。

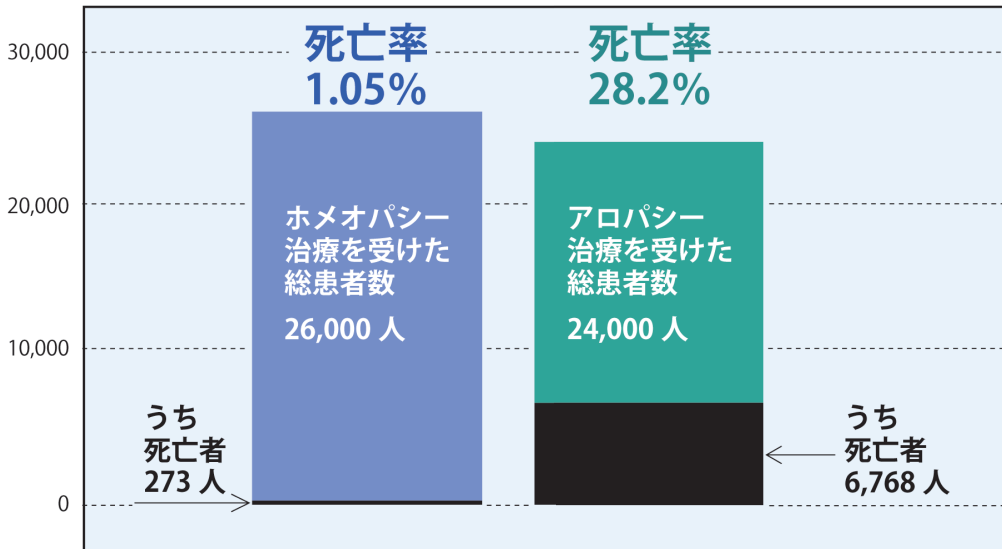
（「HOMEOPATHIC TREATMENT OF INFLUENZA（インフルエンザのホメオパシー治療）」（Sandra J. Perko, Ph.D.1999年刊からの引用、RAH訳）。

=====

1921年、ワシントンDC内、第77回「The American Institute of Homeopathy（全米ホメオパシー協会）」年次大会において、オハイオ州デイトンのホメオパシードクター、T. A. Mc Cann 医師は、「アロパシー的治療（現代医学）を受けた24,000ケースにおいてインフルエンザ

による死亡率が 28.2%であったのに対し、ホメオパシー療法を受けた 26,000 ケースの死亡率はたった 1.05%であった。」と報告した。

米国でのスペイン風邪流行時の死亡率



※ 19 世紀のアメリカでは多くの医師がホメオパシーを使っており、最もホメオパシーが盛んな時代であったが、100 年前に、医療が利益となることを知った製薬会社、財閥、当時の米国医師会トップによって、アメリカのホメオパシーはたたきつぶされた。

【ホメオパスたちの証言集（抜粋）】

「私のところでは、肺炎による死亡率は 2.1% だったが、インフルエンザによる死亡者は 1 人も出さなかった。アスピリンとキニーネを含むサリチル系薬剤のみが使用されていた従来の治療では、肺炎患者の 60% が亡くなったといわれている。」（ロードアイランド州プロビデンス Dudley A. Williams 医師ホメオパス）

「Camp Lee における私の患者の死亡率が低かった理由は、私がアスピリンの使用を完全に避けた

からにほかなりません。病院内において、私の療法による死亡率が最も低かったことから、私は医局長 = Chief Medical Doctor から称賛を受けました。また、ホメオパシーによる治療によって（従来の）アスピリンによる血液に対する作用と結果に気付いた医長は、以後アスピリンの使用を思い止まることを決めたことにより死亡率が急激に下がったのです。」（イリノイ州シカゴ Caletan A. Harkness 医師ホメオパス）

「ワシントン DC にあるホメオパシー医学協会によると、報告された 1,500 件のうち 15 人が死亡。また国立ホメオパシー病院における回復率は 100% であったと報告された。」（ペンシルベニア州フィラデルフィア E.F. Sappington 医師ホメオパス）

「私は、決してアスピリンは使わずホメオパシーのレメディーだけを使い続け、100 を超えるケー

スに立ち会ったが1人も死に至ることはなかった。従来の治療家によりすでにアスピリンを処方されていた患者が私のところに送られてきたが、その男性はその後間もなく亡くなった。この流行病は私たちに、ホメオパシーへの信頼を回復させるきっかけとなったのだ。」(メリーランド州 グレン G.H.Wright 医師ホメオパス)

「私のデータ収集に、コネチカット州の30人の(ホメオパシーの)内科医が協力してくれました。6,602 ケース中55人が亡くなり、死亡率1%以下との報告を受けました。私自身のケースでは、輸送船での勤務時に81人を診断しましたが、全員が回復し上陸しました。この時は全員がホメオパシー治療を受けていました。別の船では、航海中に31人が亡くなったそうです。」(コネチカット州 ダービー H.R.Robert 医師ホメオパス)

「私は455人のインフルエンザのケースと26人の肺炎のケースを扱ったが1人の死者も出ませんでした。使用したホメオパシーのレメディーは Gelsemium、Bryonia、Apis などです。」(オハイオ州フィンドレー T.G. Barnhill 医師ホメオパス)

「予防接種を受けた42人のうち、24人がインフルエンザにかかり8人が肺炎にかかりました。つまり予防接種は予防に失敗したという理由からホメオパシー治療の重要性は高まりつつあります。」(ニューヨーク州 ブルックリン W.L.Love 医師ホメオパス)

「11人からの報告によると、3,600 ケースのうち死亡者は6人でした。私のところでは、750 ケース中1人が亡くなりました。使用した主要レメディーは Gelsemium、Bryonia、Eupatorium などです。」(ワシントンDC F.A. Swartwont 医師ホメオパス)

「ミシガン州ランシングのあるキャンプ地では、325人のインフルエンザの患者がおり、死亡率は

20%だったが、マーフィーがホメオパシーで治療に当たっていた際の死亡率は3%に達しませんでした。」(イリノイ州シカゴ W.H.Wilson 医学博士)

「1918年の10月、私は約200人のインフルエンザ患者の治療に当たりましたが1人の死者も出ませんでした。」(ウエストバージニア州 マニントン W.R.Andrews 医師ホメオパス)

「ニューハンプシャー州 ポーツマスの M.I.Borger 医師は331人のインフルエンザ患者を治療し、うち2人が死亡。ミネソタ州のレイクウィルソンの G.C.Boscom 医師は300人を治療し、死者の数は0でした。」(メリーランド州ボルチモア E.C.Price 医師ホメオパス)

「ワシントンDCの衛生試験場における実験結果では、予防接種が肺炎に有効であると実証することはできませんでした。それとは対称的に、Gelsemium、Rhus-tox、Eupatorium など私達の使用するレメディーは、繰り返し試されたことで、安定し正確で不変的で恒久的であると証明されたことは明白です。」(1920年10月 Homeopathic Recorder 誌より)

「ニューメキシコ州の社会保険サービスでは、メキシコ系住民に対して、Veratrum viride、Gelsemium、Bryonia などのレメディーを勧めたところ、インフルエンザに対してすばらしい成果を得ることができました。ホメオパシーの治療においては、1人の死者も出なかったのです。」(イリノイ州 シカゴ C.E.Fisher 医師ホメオパス)

「士官学校において300人を超えるインフルエンザ患者の治療を行いました。死者の数はゼロでした。Gels.、Bry.、Ferr-p. が主要なレメディーで、アスピリンをすでにとっていたケースに限り回復が遅れたり、肺炎を併発したりしました。」(ミシガン州アンアーボー C.B.Stouffer 医師ホメオパス)

「私は多くの肺炎患者を含む約 500 人を治療し死に至ったのは 2 ケースでした。私は決してアスピリンは使用せず、また使用許可も与えませんでした。治療に使用した主なレメディーは Bell、Gels、Sticta、で、喉の症状には Merc、Nat-m、Kali-m を使用しました。（ワシントン州シアトル A.B.Palmer 医師ホメオパス）

ホメオパスたちは、この最中、診断を行わないだけで、自由を奪われていたわけではありませんでした。わけのわからない病魔の前に頭を掻きながら、なすすべもなく死にゆく様を眺めながら、ただ立ちすくんでいたわけではありません。彼らは、患者を救うのに病名をつける必要などなかっただけなのです。ただ、従来通りのホメオパシーを実践し、詳細に目を向け、ケースを明確に捉え、それにより導き出されたホメオパシーのレメディーを目の前にいる患者に与えすぎません。後は、レメディーが患者のバイタルフォースに働きかけるのに任せるだけです。

3 つ目のレポートは、米国で 1976 年に起こった豚インフルエンザワクチン禍について書かれた『明るみに出た豚インフルエンザの真実』

（1977 年刊 Eleanor I. McBean, Ph.D., N.D.（アメリカ）著からの抜粋（ロイヤル・アカデミー・オブ・ホメオパシー訳）。スペイン風邪流行当時に行われた予防接種キャンペーンとスペイン風邪の関係を示唆しています。原文は、ワクチン海外総合情報サイト <http://www.whale.to/vaccines.html> で見ることができます。

私はスペイン風邪流行の現場を目撃した

1918 年のスペイン風邪が流行したときに生きていた医師や一般の人々は、それが歴史上、世界中で起きた最も恐ろしい病気だと口をそろえて言っている。体力のある元気旺盛な男たちが、発

病して翌日には突然死亡していた。その流行病は黒死病（ペスト）の特徴に加え、チフス、ジフテリア、肺炎、天然痘、まひ、および第一次世界大戦直後に人々に接種されたすべてのワクチンの病気の特徴を持ち合わせていたのだ。実際に、人口に占めるほとんどの人たちが、1 ダース（12）以上の病原体からつくられた予防接種を受け、または毒性の血清を体内に注射されたのだ。そして人々が、それらの当時の医者によって作られたワクチンから来る病気を一斉に発症し始め、悲劇的な事態へと発展したのだ。

その流行病は、当時の医師たちが、症状を抑圧しようとしてさらに有毒な薬物を投与したことによって勢いが保たれ、2 年間にわたって続いた。私が知り得た限りでは、予防接種を受けたことのある人しかそのスペイン風邪にかからなかった。予防接種を拒んだ人たちはかからなかった。私の家族はすべての予防接種を拒んだため、その流行病の間ずっと元気だった。私たちはグラハム、トレール、ティルデンらの健康についての教えから、体内を毒物で汚染することが必ずや病気につながっていくことを知っていたのだ。

そのスペイン風邪の流行がピークに達したとき、すべての店、学校、事業が閉鎖された。そして、医師たちや看護師たちもワクチンを接種を受けており、そのスペイン風邪にかかっていたため、病院も閉鎖されていたのだ。

街中の道路には人っ子一人なく、まるで廃墟の町のようなだった。どうやら私の家族だけがその風邪にかからなかった。当時医師の往診を受けることが不可能だったため、私の両親が家を一軒一軒回ってできる限り病人の世話をした。細菌、バクテリアや病原菌が病気を引き起こすことが可能だとしたら、一日何時間も病人と一緒に過ごしていた私の両親を襲う機会は山ほどあった。しかし、私の両親はスペイン風邪にはかからず、また私たち子供たちに悪影響を及ぼす細菌を家に持ち帰る

こともなかった。当時は地面に雪が積もった冬だったが、私の家族は誰一人もスペイン風邪にかかることなく、鼻をグスグスすることすらなかった。

近くでくしゃみをしたり、咳をしたりしている人を不快に思って身をすくませている人を見ると、私はその人がその病気——それがなんであろうと——に感染することはないことにいつ気づくのだろうと思ったりする。ある病気にかかる唯一の方法は、誤った食事、飲酒、喫煙、または、体内の中毒を引き起こし、活力を低下させる行為をすることでその病気を自ら発症することだからだ。すべての病気を予防することが可能であり、そのほとんどが——当時の医師に知られていない、また薬物を使用しない治療家の全員にも必ずしも知られていない——正しい方法を用いれば治癒できるのである。

1918年のスペイン風邪は世界中で2千万人の人々が死亡したとされている。

しかし実際には、彼らは、当時の医者による未熟でひどい治療や、薬物によって亡くなったのだ。これは厳しい告発だが、薬物を処方しない治療家と薬物を処方する当時の医師の成功率を比較すると、それが事実なのは明らかである。

当時の医師および病院が抱えていたスペイン風邪患者の33%の死亡率と比較して、薬物を処方しない、パトルクリーク、ケログやマクファデンの治療院では、水療法、入浴、浣腸、断食やその他のシンプルな治療方法の後に献立を綿密に工夫された自然食の食事によって100%近い治癒率を達成していた。

ある治療家は8年間で1人も患者が死亡することがなかった。薬物投与をしなかった治療家のうち、患者を治癒に導き、1人も死亡させることがなかった治療家の治療法について、本書の他の章

で『有罪な予防接種』というタイトルで後に出版予定である。

もし薬物を使用する当時の医師たちが薬物を使用しない当時の治療家と同じぐらい進歩していたなら、当時のスペイン風邪によって2千万人も死者が出ることはなかっただろう。

予防接種を受けていない市民と比較して、予防接種を受けている兵士の方が7倍も病気にかかっていた。私が、海外から1912年に帰国したある兵士から聞いた話によると、軍の病院が小児まひの症例でいっぱいになっていたとのことだった。その兵士は、なぜ成人した男性が乳児のかかる病気にかかっているのかが不思議だと言っていた。このことにより、私は、それらのまひがワクチンによる中毒の後遺症だということが分かったのだ。戦争に行かず、家を守っていた人たちは、1918年の世界的な予防接種のキャンペーンの後に、初めてまひの症状を発症していったからである」

いつもとらこ先生が言っているように、体の老廃物をためず、症状は出し切ることが大事なので、とらこ先生は終始一貫して、予防接種は有害になることはあるけれど、ここから有益になることはないと言っているのです。「新型インフルエンザ」と「予防接種」の関係については、田中宇氏が、あまり日本のマスコミでは触れられていない実態に踏み込んだレポートを「インフルエンザ強制予防接種の恐怖（7月29日付）」（<http://tanakanews.com/090729flu.htm>）で発表していますので、興味のある方は是非お読みになってください。新型インフルエンザには、RX Chroni-Inf がとても良いです。